

阿弥陀如来像のお姿の持つ意味は？

● 質問

阿弥陀如来像のお姿の持つ意味について教えて下さい。

□ 阿弥陀如来像と教義

前号においては、仏像制作の歴史を振り返りつつ、阿弥陀如来像には様々なお姿があり、しかも時代の中で変遷のあったことを確認しました。

そうした変容の中で、現在の阿弥陀如来像が制作されるに至るわけですが、今号では、阿弥陀如来像の「立像」という基本的なお姿について再確認しながら、尊像の持つ意味について、教義の上から考えてみたいと思います。

□ 仏像の基本型

前号でも触れましたが、仏

像のお姿は、大きくは坐像と立像とに分類することができま

す。この坐・立という仏像の二つの形は、仏像制作の初期段階から見られるものです。坐像や立像には様々なバリエーションがありますが、この二つの基本的な仏像様式について、どのように理解することができようでしょうか。

例えば結跏趺坐し禪定印を結ぶ坐像においては、仏のさとりが表現されています。一方、立像には説法印や施無畏・与願印の像が多く見られるように、仏の救済活動の姿が表現されるのが、一つの特徴になっていきます。いささか大まかな分類となりますが、両者の特徴は、静と動、智と悲、と言つて良いでしょう。

このように、仏像の形は大きく二種類に分けることができますが、阿弥陀如来像にも坐像と立像が見られ、宗門では立像を形像本尊としています。それでは、その典拠はどこに見出せるのでしょうか。

□ 形像の典拠

「浄土三部経」の中に、阿弥陀如来のお姿を説く箇所が見られます。「観無量寿経」第八像観に、

阿弥陀仏を想い描くには、まずその像を想い描くのである。目を閉じていても開いていても、金色に輝く一体の仏像が、その蓮の花に座つておいでになるようすを常に想い浮べるがよい

（『浄土三部経（現代語版）』、一八〇頁）

と説かれています。

また、同じく『観経』の第七華座観の冒頭部分に、

るいは彫刻しあるいは画図す（九一九頁）と説かれており、「本尊」を礼拝の対象を意味する言葉として用いらつしやいます。また、蓮如上人は「本尊は掛けやぶれ、聖教はよみやぶれ」（二二三三頁）と仰いました。この「本尊」は、元々「自己が敬愛する尊格」という梵語の訳語であり、真宗で言えば、信仰の帰するところである阿弥陀如来が「本尊」であるということになります。この真宗の本尊の形式については、木像、絵像、更に名号もありますが、信仰の所帰が阿弥陀如来一仏であるという意味においては、それらに何らの違いもありません。

ところで、先程紹介した『観経』のご文には、「その左右には観世音・大勢至の二菩薩がつきそつておられた」とありました。阿弥陀如来は、慈悲の菩薩「観音」・智慧の

積尊のこのお言葉とともに、無量寿仏が突然空中に姿を現してお立ちになり、その左右には観世音・大勢至の二菩薩がつきそつておられた（同、一七八頁）と説かれています。『観無量寿経』には、このように阿弥陀如来のお姿が二様に説かれていますが、第八像観のご文では座つてお姿、第七華座観ではお立ちになってお姿が説かれています。立像である形像本尊のよりどころということでは、第七華座観が、その典拠と言えます。

□ 立像の意味

それでは、なぜ真宗の本尊が第七華座観に依つてお姿とされるのでしょうか。阿弥陀如来は、釈尊の「わたしは今そなたたちのために、苦惱を除く教えを説き示そう」（同頁）という言葉に応じて空中にお立ちになられました。釈

菩薩「勢至」の二大士とともに姿を表されたわけですが、宗門では悲智の二徳を具える阿弥陀一仏を本尊とします。ここに、阿弥陀如来の救いを一心一向に仰いでいくという宗風が発揮されているのです。

□ 本尊の形と礼拝

最後になりましたが、本尊は、そのお姿について「知る」ことに意味があるのではありません。お姿を通して、阿弥陀如来の救いを聞いていくことが大切です。

宗門の本尊は、来迎のお姿でなく、また観察行の対象でもありません。方便法身のお姿として、すなわち、第十八願を成就され、今まさに、一切衆生を救わんとしてはたらいらつしやるお姿であると受けとめ、敬信していくべきものであります。

（教学伝道研究センター常任研究員 藤丸智雄）

尊のお言葉から、この阿弥陀如来のお姿が、生死に迷う凡夫を救おうとするお姿であると知ることができます。

このことについて善導大師（六二二―六八一）は、「仏はその徳が気高く、軽々しいふるまいはなさらないはずだが、本願にたがうことなく来てお姿を示された。大悲のお方は、なぜ、端座されたままで衆生を救おうとされなかつたのか」との問いを立て、「娑婆の苦界においては、欲望が常につきまとい、地獄・餓鬼・畜生の三悪道の火の坑にまさしく落ちそうになっている。もし立ちあがつて迷つてお姿を救わなければ、どうして悪業によって繋ぎ止められた牢獄から離れられよう」（七祖四二四頁、取意）と答え、立ちながらに衆生を救う（立攝即行）意を示されています。

この善導大師のお言葉か

らも、立つてお姿が、衆生救済の本願の救いのお姿であると確認されます。そして、その救いは、煩惱に惑い三悪道に墮ちていこうとする、わたしたち凡夫に向けられたものです。最初に説明した坐像・立像の違いということでは、大悲のはたらきを鮮明にされたお姿と言えましよう。このように、『観経』第七華座観に示されるお姿が、本願の救いを表すものであるからには、私たちの依用する立像という様式は、真宗の宗義にまさしくかなつたものと言えるでしょう。

□ 弥陀一仏を本尊とする

ここで「本尊」ということについて、少し考えてみましょう。親鸞聖人は「本尊」という言葉を使用されていませんが、覚如上人は『改邪鈔』で「身業礼拝のために、渴仰のあまり瞻仰のために、絵像・木像の本尊をあ